

# 自己開示性と被開示性の関連についての一考察

— 高校生と大学生の違いを中心に —

## A Study about Self-Disclosure and Acceptance of Others

— Differences between High School and University Students —

井上 清子\*・立花 彩加\*\*

Kiyoko INOUE, Ayaka TACHIBANA

**要旨：**本研究では、高校生・大学生各 112 名を対象に、自己開示と被開示についての質問紙調査を行い、自己開示・被開示・両者の関連性について、高校生と大学生を比較検討した。

自己開示尺度合計点、被開示尺度合計点とも、*t* 検定によって有意差がみられ、大学生の方がより自己開示や被開示を行っていた。自己開示と被開示の関連性では、高校生では、自己開示尺度合計点となごみ因子点、共感因子点の間に有意な相関がみられたが、大学生では、自己開示尺度合計点と共感因子点との間に有意な相関がみられなかった。このことから、高校生は自己開示をして同じ立場であることを示して共感するが、大学生では、必ずしも自己開示せずに相手の立場に立って共感することが可能であるためと考えられた。

### 1. はじめに

自己開示とは、個人的な情報を他者に知らせる行為であり、相手に分かるように自分自身をあらわす行為である<sup>1)</sup>。榎本<sup>2)</sup>は、自己開示の動機について、①新たな洞察を得るための自己開示（相談的自己開示動機）、②心の中に充満した情動を解放するための自己開示（情動開放的自己開示動機）、③孤独感から救われるための自己開示（親密感追求的自己開示動機）、④相手に自分を理解してもらうための自己開示（理解・共感追求的自己開示動機）、⑤自分の中の不安を消し去るための自己開示（不安解消的自己開示動機）の 5 つをあげている。いずれの動機にせよ、自己開示は開示する相手を必要としており、相手の態度によって開示者の自己開示後の心理状態も変わってくる<sup>3)</sup>ことが報告されている。自己開示研究において、他者の開示を引き出しやす

---

\* いのうえ きよこ 文教大学教育学部

\*\* たちばな あやか 文教大学教育学部卒

い人をオープナー<sup>4) 5)</sup>という。越ら<sup>6)</sup>は、被開示者（オープナー）の特性として、態度特性では安心・共感的態度、行動特性では受容・共感的行動、アイコンタクト行動、容姿特性では優しい容姿をあげている。すなわち、オープナーには開示者への受容と共感が求められている。しかし、一方が自己開示した程度に応じてもう一方も自己開示をするという、自己開示には相互性（reciprocity）がある<sup>7)</sup>とも言われている。このように、自己開示と被開示については間接的には関連性が想定されながらも、それぞれ別個に研究されており、自己開示性と被開示性の関連について明らかにしている論文は筆者の知る限りではない。

そこで本研究では、自己開示性と被開示性の関連について明らかにすることを目的とする。また、自己開示は年齢とともに、開示相手や内容などが徐々に変化していく<sup>8)</sup>と言われていることから、高校生と大学生における自己開示性と被開示性およびその関連の相違に着目し考察していく。

## 2. 方 法

### （1）調査対象

高校2年生112名（男子56名、女子56名）、大学2～4年生112名（男子56名、女子56名）。

### （2）調査方法

高校または大学の教室において授業の後に調査の趣旨や内容について説明したうえで、質問紙配布を行い、同意が得られた生徒・学生に回答してもらい、その場で回収した。

### （3）使用尺度

#### ① オープナー・スケール（被開示尺度）

小口（1989）<sup>5)</sup>によって作成された自己開示の受けやすさの個人差を測定する尺度（10項目）を被開示尺度として使用し、本研究では「1. 全くあてはまらない」「2. ややあてはまらない」「3. ややあてはまる」「4. 非常にあてはまる」の4件法で回答を求めた。

#### ② 自己開示質問紙（ESDQ-45）

榎本（1989）<sup>8)</sup>によって作成された自己開示の内容や程度を測定する尺度15因子45項目の中から、本研究では12因子36項目を使用した。回答者の負担を考え、「自己」の「開示」とは関連が薄いと思われる「うわさ話」「意見」に関わる2因子6項目、さらに集団場面では回答しづらいと思われる「性的側面」3項目を削除したためである。「1. 全く話したことがない」「2. あまり話したことがない」「3. かなり話してきた」「4. 十分に話してきた」の4件法で回答を求めた。

## 3. 結 果

### （1）自己開示尺度の信頼性

榎本（1989）の先行研究を元に、自己開示尺度を「知的側面」、「情緒的側面」、「志向的側面」、「外見的側面」、「体質・機能的側面」、「同性関係」、「異性関係」、「公的役割関係の側面」、「物質的自己」、「血縁的自己」、「実存的自己」、「趣味」の12因子について信頼性を調べるために $\alpha$ 係

数を求めた（表1）。各因子は3項目から成り立っているため、全体的に $\alpha$ 係数は高くはないが、「知的側面」.399、「趣味」.427、以外は.50以上であることから使用できると判断し、本研究での自己開示尺度は、「知的側面」「趣味」を除いた10因子で検討していくことにした。

## （2）被開示尺度の信頼性

小口（1989）の先行研究を元に、被開示尺度を「なごませ因子」と「共感因子」の二つに分け、それぞれの信頼性を調べるために $\alpha$ 係数を求めた（表2）。その結果、「なごませ因子」が $\alpha = .737$ 、「共感因子」が $\alpha = .654$ となった。小口の研究において、 $\alpha$ 係数は「なごませ因子」が.642、「共感因子」が.615であることから、本研究での被開示尺度も、「なごませ因子」と「共感因子」の2因子で検討していくことにした。

表1 自己開示尺度の信頼性

情緒的側面（計3項目）	$\alpha = .674$	2. 心をひどく傷つけられた経験 15. 情緒的に未熟と思われる点 28. 嫉妬した経験
志向的側面（計3項目）	$\alpha = .657$	3. 現在持っている目標 16. 拠り所としている価値観 29. 目標としている生き方
外見的側面（計3項目）	$\alpha = .734$	4. 容姿・容貌の長所や短所 17. 外見的魅力を高めるために努力していること 30. 外見に関する悩み事
体質・機能的側面（計3項目）	$\alpha = .579$	5. 運動神経 18. 体質的な問題 31. 身体健康上の悩み事
同性関係（計3項目）	$\alpha = .644$	7. 友人に対する好き・嫌い 20. 友人関係における悩み事 33. 友人関係に求めること
異性関係（計3項目）	$\alpha = .857$	8. 過去の恋愛経験 21. 異性関係における悩み事 34. 好きな異性に対する気持ち
公的役割関係（計3項目）	$\alpha = .687$	9. 職業的適性 22. 興味を持っている業種や職種 35. 人生における仕事の位置づけ
物質的自己（計3項目）	$\alpha = .515$	10. こづかいの使い道 23. 自分の部屋のインテリア 36. 服装の趣味
血縁的自己（計3項目）	$\alpha = .741$	11. 親の長所や短所 24. 家族に関する心配事 37. 親に対する不満や要望
実存的自己（計3項目）	$\alpha = .630$	12. 生きがいや充実感に関する事 25. 人生における虚しさや不安 38. 孤独感や疎外感

表2 被開示尺度の信頼性

なごませ因子（計5項目）	$\alpha = .737$	1. 人からその人自身についての話をよく聞かされる。 4. 人は私に秘密を打ち明け信頼してくれる。 5. 人は気楽に心を開いてくれる。 6. 私といると相手はくつろいだ気分になれる。 9. 人に何を考えているのか話すように持ちかける。
共感因子（計5項目）	$\alpha = .654$	2. 聞き上手だと言われる。 3. 私は他人の言うことを素直に受け入れる。 7. 人の話を聞くのが好きである。 8. 人の悩みを聞くと同情してしまう。 10. 私は他人がその人自身の話をしているとき話の腰を折るようなことはしない。

## (3) 自己開示尺度にみられる高校生と大学生の違い

属性をグループ化変数、自己開示尺度の各因子点および合計点を検定変数として $t$ 検定を行ったところ、情緒的側面、志向的側面、同性関係、異性関係、公的役割関係、合計点（ $p<.01$ ）、実存的自己（ $p<.05$ ）、において有意差が見られ、すべて大学生のほうが高かった。（表3）一方、外見的側面、体質・機能的側面、物質的自己、血縁的自己では有意差は見られなかった。この結果により、高校生よりも大学生の方が、家族以外の人間関係や、より内面的、精神的な内容についての自己開示が行われていることが推察された。

表3 高校生と大学生の自己開示尺度得点の比較

自己開示尺度	職業	N	平均値	標準偏差	t 値
合計点	高校生	122	67.86	15.109	-3.502**
	大学生	122	74.36	12.554	
情緒的側面	高校生	122	6.46	2.105	-3.181**
	大学生	122	7.35	2.096	
志向的側面	高校生	122	6.95	2.048	-3.943**
	大学生	122	8.00	1.950	
外見的側面	高校生	122	6.67	2.006	-.504
	大学生	122	6.80	1.972	
体質・機能的側面	高校生	122	6.92	1.894	-.521
	大学生	122	6.79	1.952	
同性関係	高校生	122	7.41	2.264	-3.554**
	大学生	122	8.41	1.934	
異性関係	高校生	122	7.15	2.614	-3.644**
	大学生	122	8.38	2.405	
公的役割関係の側面	高校生	122	6.79	1.997	-4.155**
	大学生	122	7.90	2.022	
物質的自己	高校生	122	6.73	1.982	-.601
	大学生	122	6.88	1.795	
血縁的自己	高校生	122	6.22	2.200	-1.602
	大学生	122	6.71	2.304	
実存的自己	高校生	122	6.56	2.109	-2.180*
	大学生	122	7.14	1.869	

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

#### (4) 被開示尺度にみられる高校生と大学生の違い

属性をグループ化変数、被開示尺度のなごませ因子点、共感因子点、合計点を検定変数として  $t$  検定を行ったところ、なごませ因子、共感因子、合計点ともに大学生の方が高く  $p<.01$  で有意差が見られた（表4）。この結果から、高校生よりも大学生の方が被開示性が高く、相手をなごませ、共感し、自己開示を促すオープンナーとしての能力が上がっていることが示唆される。高校から大学という環境の変化に伴い、講義、サークル、ボランティア、アルバイト等、行動範囲や人間関係も広がっていくなかで、被開示の能力も発達していくのではないだろうか。

表4 高校生と大学生の被開示尺度得点の比較

自己開示尺度	職業	N	平均値	標準偏差	t 値
合計点	高校生	122	26.46	4.808	-3.575**
	大学生	122	28.68	4.456	
なごませ因子	高校生	122	12.88	2.665	-2.713**
	大学生	122	13.83	2.606	
共感因子	高校生	122	13.59	2.697	-3.720**
	大学生	122	14.85	2.357	

\*\* $p<.01$

#### (5) 自己開示と被開示の関連性

高校生と大学生にわけて、自己開示尺度と被開示尺度の合計点と各因子点について Spearman の相関分析を行ったところ、表5、表6の結果が得られた。

表5 被開示尺度と自己開示尺度の相関分析（高校生）

	なごませ因子	共感因子	被開示尺度合計点
情緒的側面	.366**	.218*	.346**
志向的側面	.297**	.145	.263**
外見的側面	.433**	.364**	.465**
体質・機能的側面	.142	.165	.191*
同性関係	.388**	.281**	.381**
異性関係	.458**	.286**	.395**
公的役割関係の側面	.283**	.214**	.288**
物質的自己	.183	.147	.200**
血縁的自己	.190*	.047	.126
実存的自己	.179	.181	.197*
自己開示尺度合計点	.438**	.344**	.449**

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$

表6 被開示尺度と自己開示尺度の相関分析（大学生）

	なごませ因子	共感因子	被開示尺度合計点
情緒的側面	.272**	.102	.214*
志向的側面	.443**	.093	.324*
外見的側面	.199*	.023	.132
体質・機能的側面	.084	-.056	.012
同性関係	.179	.048	.104
異性関係	.315**	.140	.242*
公的役割関係の側面	.265**	-.043	.135
物質的自己	.159	-.045	.059
血縁的自己	.151	.085	.115
実存的自己	.179	-.031	.094
自己開示尺度合計点	.357**	.013	.215

\* $p<.05$ , \*\* $p<.01$ 

高校生では、自己開示尺度合計点と被開示尺度合計点およびなごませ因子点、共感因子点の間には有意な正の相関がみられた ( $r = .341 \sim .441$ )。自己開示尺度の各因子点と被開示尺度の各因子点の相関では、異性関係 ( $r = .458$ )、外見的側面 ( $r = .433$ ) となごませ因子に、他の因子よりも高い相関がみられた。すなわち、高校生では、被開示性の高い、すなわちオープナーとしての特性が高い者ほど自己開示を多く行っており、特に異性関係や外見的側面について自己開示を行うことで相手をなごませることが考えられた。

大学生では、自己開示尺度合計点と被開示尺度合計点およびなごませ因子点の間には有意な正の相関がみられた ( $r = .205 \sim .352$ ) が、共感因子点との間には相関はみられなかった。この結果からは、大学生は自己開示をする者ほど相手をなごませるが、必ずしも相手への共感性が高いとは限らないことが推測される。あるいは、大学生では共感性の高い者が、必ずしも自己開示を多くしているとは限らないともいえる。高校生では自己開示をして自分も同じであることを示すことで相手への共感を表すが、大学生では自分の話をせずに相手の立場にたって共感することが出来るようになる可能性が考えられた。これは、高校生は人間関係を構築する際、自己開示を行い、相手の自己開示を引き出し受け容れるという方法を用いるが、大学生は必ずしもそうではなく、発達・成長に伴い、自他の関係を構築する手段が広まることを示しているのではないだろうか。自己開示尺度の各因子点と被開示尺度の各因子点の相関では、志向的側面 ( $r = .458$ ) となごませ因子に、他の因子よりも高い相関がみられた。大学生では目標や価値観などより内面的な話題の自己開示によって相手が心を開くことが推測された。

## 5. まとめ

本研究では、高校生・大学生各 112 名を対象に自己開示と被開示についての質問紙調査を行い、自己開示性、被開示性、両者の関連性について、高校生と大学生を比較検討した。

自己開示尺度合計点、被開示尺度合計点とも、 $t$  検定によって有意差がみられ、高校生より大

学生の方が高かったことから、大学生の方がより自己開示や被開示を行っていることが推察された。自己開示では、高校生よりも大学生の方が、より内面的、精神的な話題について話していた。

自己開示性と被開示性の関連については、高校生・大学生とも、自己開示尺度合計点と被開示尺度合計点、なごみ因子点の間に有意な正の相関がみられた。高校生では自己開示尺度合計点と共感因子点の間にも相関がみられたが、大学生ではみられなかった。これは高校生と大学生の共感の仕方が異なるためではないかと推測された。

#### 引用文献

- 1) Jourard, S. M. (1971) Self-disclosure: An experimental analysis of the transparent self. NewYork ; wiley-Interscience.
- 2) 榎本博明 (1986)「自己開示」詫摩武俊 (監修)『パッケージ性格の心理 (第5巻) 自分の性格と他人の性格』ブレーン出版 pp.25-40
- 3) 西千弘 (2008)「被開示者の受容・拒絶が開示者に与える心理的影響：開示者・被開示者の親密性と開示者の自尊心を踏まえて」『社会心理学研究』23 (3) pp.221-232
- 4) Miller, L. C., Berg, J. H., & Archer, R. L., (1983) Openers : Individuals who elicit intimate self-disclosure. Journal of Personality and Social Psychology, 44, pp.1234-1244
- 5) 小口孝司 (1989)「自己開示の受け手に関する研究 — オープナー・スケール, (R-JSDQ) と (SMI) を用いて —」『応用社会学研究』31 pp.49-64
- 6) 越良子・塚脇涼太・平山菜央子 (2009)「自己開示における被開示者の特徴と検討 — 開示者の開示動機との関連から —」『上越教育大学研究紀要』28 pp.29-39
- 7) 榎本博明 (1983)「対人関係を規定する要因としての自己開示研究」『心理学総論』26 pp.91-97
- 8) 榎本博明 (1989)「自己開示動機に関する研究」『日本教育心理学会第31回総会発表論文集』p.237